

論 文 要 旨

〔 日本の高飲酒集団における
食物摂取頻度調査票の妥当性に関する研究 〕

中 畑 典 子

【序論および目的】

飲酒者におけるアルコール摂取は総エネルギー摂取量の中で比較的大きな重みを有し、大量飲酒者の食生活は非飲酒者と異なることが報告されているが、高アルコール摂取が食物摂取頻度票 (FFQ) の妥当性に与える影響についての研究は殆ど行われていない。高アルコール摂取が FFQ の妥当性に与える影響について検索するために、高飲酒集団において、FFQ の妥当性の検討を行い、東海地域で行われた先行研究の結果と比較した。

【対象者および方法】

あまみ島嶼地域の A 市に在住する 40-69 歳の男女一般住民 99 名を対象に栄養調査を実施し、最終的な解析対象者数は 66 名であった。FFQ は 47 食物からなり、FFQ 実施後に秤量記録調査 (WDR) を実施した。WDR は季節ごとに 3 日間、1 年間で計 12 日分の情報を収集した。それぞれ、エネルギー、22 種類の栄養素、3 つのマクロ栄養素のエネルギー比、アルコールエネルギーおよびアルコールエネルギー比を見積もった。さらに、あまみ地域でのエネルギーに寄与する食品の特徴を明らかにするため、WDR から求めた上位 10 食品の累積寄与率を男女別に求めた。

栄養素摂取量の比較は、対数変換しエネルギー調整した後、ピアソンの相関係数(CC)を計算した。De-attenuated Pearson CC は一元配置分散分析によって個人内-個人間変動の希釈補正を用いて計算した。また、群ごとに正確一致(EA)、隣接一致(AA)、不一致(DA)を算出し比較した。

【結 果】

WDR と FFQ から見積もった摂取エネルギーは、女性で 1,641 kcal と 1,534 kcal、男性で 2,093 kcal と 1,979 kcal であった。エネルギー調整後の CC の分布は、女性で 0.25-0.81、男性で 0.18-0.64 であった。中央値は、女性で 0.51 と先行研究における東海研究における値 0.39 より高く、男性では 0.38 と東海研究の 0.47 より低かった。エネルギー調整後の四分位階層化による EA 率、AA 率、DA 率の中央値は、男女間でほとんど差が無く、男女ともに東海研究とほぼ同じ値であった。あまみ地域におけるエネルギー寄与食品の内訳でアルコール飲料は、男性で焼酎が 2 位、ビールが 7 位を占めていた。アルコールエネルギー比は女性で 0.9%、男性で 6.7%だった。また、エネルギーに対する砂糖類の寄与率は、女性で 1.9%、男性で 0.8%であった。

【結論及び考察】

本研究における CC の中央値は、本研究と同様の短縮版 FFQ を用いて本邦で行われた 7 つの先行研究の結果 (0.41) に比べ、女性でやや高く、男性でやや低い値を示した。これは、本研究と同じ FFQ を用いた東海地域における研究結果と比較しても同様であった。この差には、対象者の少なさによる個人間変動、FFQ に含まれない地域特有の食品、高アルコール摂取による部分的な影響により生じている可能性が考えられる。

本 FFQ における炭水化物等の栄養素が低く見積もられていることは考慮する必要があるが、WDR と FFQ 間の四分位比較で高い一致率が得られたことは、本 FFQ が栄養摂取量の階層化比較を用いる疫学研究において、あまみ地域で使用可能であることを示唆している。